

陳 述 録 取 書

2005年7月31日、当職はインドネシア共和国プカンバルにて以下の者より井上千寿代を通訳として録取したので報告する。

氏 名	ザキルマン (Zakirman)
K . T . P .	04.01.03.12.1.02204
原告番号	D.2
性 別	男
生年月日	1961年1月30日(45歳)
氏 族	ムラ・ユ族
宗 教	イスラム
学 歴	SMP(中学校)卒業
職 業	農業
家族構成	妻(42歳)、長男(19歳)、次男(16歳)、長女(14歳)、次女(9歳)

2005年7月31日

1. 移転前の生活状況

1) 私は旧バツウ・ブルスラットに住んでいましたが、ダム開発によってルブック・アゲンに移転させられました。移転こと、移転後の生活ことなどお話しします。

私は1960年5月12日に生まれました。1983年に結婚し、現在は妻(42歳)、長男(19歳)、次男(16歳)、長女(14歳)、次女(9歳)の6人家族です。

結婚後に住んだ住宅は、4×3メートルの大きさで、木造家屋でした。私の家では農業、漁業を営んでおり、主な収入源は漁業でした。この外によその農地で働いて収入を得ていたこともあります。ダム発によって、移転させられた後は農業のみで生計を立てています。私の家は、カンパル川からは100mほどしか離れていませんでしたから私たちは川で漁業を行っていました。川で捕れた魚や畑の作物を家族で消費していましたし、さらに余った分を、売買して現金収入を得ていました。飲料・調理用水は、カンパル川にまで出掛けて行って取水していました。また、水浴び、洗濯、排泄なども、この川で行っていました。

旧村で生活していた頃は、ココナツ、ドリアン、ラン、野菜などの生活に必要なものの必需品は、そのほとんどが自給できました。また、漁業、農業からの収入で私の生活は十分でしたし、子供の教育に困ることもありませんでした。子供らの小学校は500mぐらいのところにありました。モスクも近くにありました。

2) 農業

家の周りには、父に使わせてもらっている0.25haぐらいの広さの庭地（畑）があり、そこには、ココナツ、ドリアン、ランブータン、コーヒーなどの果樹が植えていました。いずれも現金収入になる価値あるものです。収穫期にはドリアンからの収入は30万ルピアぐらいになりました。ランブータンは50万ルピアで売れました。当時、ココナツはまだ収穫を得るところまでは生きませんでした。

このほかにも0.5haぐらいのみかん園を持っており、そこには、60本のミカン樹を植えていました。ミカンは毎年だいたい2トンぐらいの収穫があり、収穫期にバツウ・ブラスラットで売りに行きました。みかんからの収入はだいたい150万ルピアぐらいはあったと思いますが、それで2ヶ月から3ヶ月ぐらいは家族が生活できました。インドネシアの物価は当時と今とでは比べものにならないくらい違います。スハルト政権が倒れたころに物価が2倍、3倍とどんどんあがっていた時期があります。ですから、当時は今に比べれば、物価はるかに安かったので150万ルピアでもけっこうな収入でした。

庭では山羊やニワトリを飼って、市場で売りました。旧村のにわとりや山羊の飼い方は、近所に適当に放し飼いにしておくというものです。旧村では私も含めてみな広い土地を持っていて、家畜が勝手に入っても誰も文句を言う人がいませんでした。しかし、現在では土地が狭く、ニワトリを飼うことはできません。

この他、私は父の土地を利用して陸稲(gogo)を植え、近隣の村人とともに、「ゴトン・ロヨン」方式で栽培しました。「ゴトン・ロヨン」というのは近所が集まってみなで協力して耕作をするやり方でした。この時に作った米は家族のみんで1年間食べるだけの量を作るというものでしたから、特に売りに出していないでしてました。旧村では昔ながらのやり方で陸稲を栽培していましたが、土地も肥えていて陸稲に病気が出るということはありませんでした。移転後も陸稲を植えてみましたが、土地の状態が悪いためか病気も出て、十分な収穫はできていません。

3) 漁業

私の父はカンパル川の漁師で、私も子供の頃から父に習って漁に出ていました。漁法は全て父から受け継いだものです。大人になってからも私はカンパル川で漁業を行っていました。漁法としては、もっぱら網を張る方法、投網、釣りをを用いる方法でした。主な漁獲魚は、シカム、レラン、カピエ、タパ、ゲソ、バウン、マリ(mali)です。私は漁師でしたから毎日漁に出ていました。朝4時には出て、午前10時には一旦帰り、夜とれる魚もありましたから午後2時にまた出て午後10時には帰るという生活でした。午前中とれた魚はすぐに市場に持って行き、夜とれた魚は翌日妻が市場などに持って行きました。漁獲魚は、一部を家庭で食べましたが、大半を市場に回しました。魚は毎日食べており、何も買う必要がありませんでした。魚を食べていたときは私たちはみな元気でした。収穫は一週間に50kgはありました。時々ゲソやタパという大きな魚が捕れるのですが、それは20kgぐらいありました。収穫は1日に15000ルピアにありました。これは、今の値段から言えばたぶん75000ルピアぐらいだと思います。漁に出るの大変楽しく、昔の生活は大変幸せでした。近所の人々もみな漁業で生活していました。

4) 出稼ぎ

移る前は出稼ぎに出たことはほんの一時期を除いてありません。漁業と、畑からとれる収穫で経済的には十分やっていた。しかし、移転させられてからは、経済的には困り出稼ぎに出かけるようになっていきます。

5) タナウラヤット

タナウラヤットはスクで管理していました。いくつかのスクが共同で持っているタナウラヤットもありました。

タナウラヤットというのは部族が持っている森のことですが、私たちの村ではその一部を切り開いて陸稲を収穫していたのです。部族のもので利用が終わると返すということになります。つまり、次の世代も使えるようにするために陸稲だけを植えて、すぐに返すということが繰り返されるのです。スクのもので、開墾なども地域の人がいっしょになってやっていました。

私たちの村では結婚するとタナウラヤットから土地を借りることができます。私たちも結婚当初、タナウラヤットから土地を 1ha ぐらい借り、陸稲の収穫をしていました。収穫が終わるとこれを返して、また別のタナウラヤットを借りました。移転前は私はタナウラヤット 1ha、父の土地 0.5ha から陸稲を収穫していました。新婚夫婦にとってはまだ財産がありませんからタナウラヤットを利用して大変助かりました。

6) 地域のつながりについて

旧村は、伝統的なミナンカバウ社会そのものでした。そこには、ウラヤット地制度があり、伝統的なやりかたで共同の財産を大切にしてきました。旧村には大きなルマ・ガダンがありました。これはミナンカバウの伝統的な様式建物で非常に立派なもので私たちの誇りでした。ルマ・ガダンではミナンカバウの伝統的な行事が1年に1度、盛大に催されました「パンチュ・ピナン」という行事がありますが、これは木登り競争です。木には油が塗ってあり、力と勇気ある者が挑戦することができました。「ブンチャク・シラット」という行事がありましたが、これは武道大会です。「デキル・バナ」という踊りながら太鼓をたたき、男性のたくましさを表す行事もありました。これらは祖先を思い出し、大切にするという神聖なお祭りでした。しかし、集落のこうした伝統的なつながりは移転によって無くなってしまいました。

かつてはカンパル川が近くにありましたから、ラマダンの前に河川で身体を清める「バリマウ」の習慣がありました。その時には船に飾りを付けて男たちが乗り、競争しました。

村ではスクごとに共同の墓地がありました。私の部族にはラツウ・スマジェロ (Datu Sumajelo) という共同墓地がありました。政府は共同墓地については何も考えていませんでした。当然、補償もされませんでした。私の最初の子供は1日でなくなり、この子は共同墓地に埋葬されています。現在は村で一つの墓地になっています。

2. 移転の経緯

1) バンキナン会議まで

ダムのことに関しては1983年ころ大学の人たちが調査に来たことを覚えています。このときに村人間ではダムのお話を噂していました。これは、ちょうど結婚した当初のことになります。あくまで噂だけが流れており、ダムについての政府からの説明は全くありませんでした。

1983年12月19日にニニック・ママックがバツウ・ブスラット村のプサントレン（イスラム学校）において会合を開いてたことがありました。この会合についてはあったことは知っていますが、何があったかは知りません。アニスさんはよく知っていると思います。この会合の時にダム開発について政府に対して要望をまとめたことあったということは知っています。これは政府に対して意見を言うことになるので、それを聞いて、私は不安な気持ちになったことを覚えています。当時の独裁政権の下では私は政府に対して何か言うということは大変恐ろしいことのように思ったのです。

1987年に、TEPSCO調査団が現地訪問したことについて聞いて知っているだけです。

1989年ころになって初めて正式にニニック・ママックから村の移転先を知らされました。バツウ・ブスラットは3つの地域に分かれるということでした。これはドスン(du sun)と呼ばれるグループで分かれ、そのグループごとに移転先を決めたのです。私の移転先はルブック・アグンだった訳ですが、カンパル川から遠かったために、漁師の生活をあきらめざる得ないと思い、この先どうなるか不安でたまりませんでした。また、土地がよくないことも分かっていました。しかし、政府に逆らえば逮捕されたり、何か恐ろしいことをされるので、政府の決めたことに逆らえるはずもありませんでした。

1991年4月13～14日に開かれたバンキナン会合が行われたのですが、そのことは会合が終わってから知りました。バンキナンの会合のことは村の人が噂し合っていたの私も知ることができたのです。当時、私たちはバンキナン会議はダムに関連することであることはみな噂し合っていました。このときに移転のこと、補償金のことを話したのだろうと噂さしあっていましたが、詳しいことは何一つ分かりませんでした。

このころだと思いますが、PLNが村の幹部をジャカルタ招待旅行に招待したとすることがありました。このときに、お金を入れた封筒が渡されたということが噂されていました。

2) バンキナン会議以降

このバンキナン会合の後に、村のニニック・ママック、村長などの社会指導者らが、県知事庁舎に呼ばれました。

弁護士：そのときに、彼等が「移転同意表明書」に署名したことを知っていますか。

ザキルマン：何があったかは私は知りません。

弁護士：村の人は聞こうとしなかったのですか。

ザキルマン：しませんでした。

弁護士：なぜですか。

ザキルマン：聞こうとしてもそういうことをしてはいけないと思っていましたから聞こうとしませんでした。

弁護士：なぜ、聞こうとしなかったのですか。

ザキルマン：このときはスハルトの時代でしたからみな怖がっていました。何をするにしても政府に反するようなことはしてはいけないと思っていたのです。

弁護士：何か報復があると思っていたのでしょうか。

ザキルマン：もし、政府の言うとおりにしなければ何も与えられないとことなるだろうと思っていました。何も与えられずに村から移転させられるかもしれないという恐怖もありました。

弁護士：もし、ダムに反対するようなことになれば警察に逮捕されるようなことになるかもしれないという恐怖はありましたか。

ザキルマン：警察も怖かったし、軍隊も怖かったです。もし私たちが反対すれば、軍隊が私たちを逮捕したり、暴力を加えることがあったでしょう。ニニック・ママックも怖かったろうと思います。

2) 知事庁舎に行った後にニニック・ママックより移転補償について知らされました。このときに補償金が払われるということが掲示板に貼られました。しかし、具体的な内容は書いてありませんでした。その後、ムショラに集まり、ニニック・ママックから測量のチームが来て、家と土地などを測量士、それに基づいて補償が払われるということを知りました。そのときに言われたときに 1ha の土地は 30 万ルピアということだけで、他のことは何も言われませんでした。そのときは補償金とは別にセミパーマネントの家が用意されること、その外にもゴム園が 2ha、20 × 40m の庭園、40 × 100m のパラウィジャが至急されるということでした。ゴム園、パラウィジャは作物が既に生育して収穫可能なものが支給されるということでした。また、3 年間食料が保障されるということでした。電気、水道は無料ということでした。今より暮らしは良くなると思っていました。このことはニニック・ママックが知事が約束したということで話したのです。しかし、後ほどお話ししますが、実際にはその通りには行っていません。

ニニック・ママックの説明があった後に測量が行われました。私の家も測量が行われました。このときに、地方政府の土地担当者が 3 名ほど来ました。その後、財産目録が作成され、その報告が行われました。財産目録には私はサインをしています。しかし、私は移転同意というものに署名したことはありません。目録は正しかったのですが、補償の金額はきわめて低いものでした。全く、現実離れしたものでした。家の価格なども全く低く、作物の価格も全く低いものでした。私の場合は漁業で生きていたのですが、私の漁業に対する補償は全くありませんでした。

弁護士：あなたは漁師だったので漁師の生活に合わせた補償がなかったのですか。

ザキルマン：漁業収入についての補償は全くありませんでした。

弁護士：それを頼まなかったのですか。

ザキルマン：どこに頼んだらよいか分かりません。漁業に対する補償が無かったので私

は将来の生活をどうしたらいいか不安でした。私の子供の教育費などはどうしていいか分かりませんでした。実際、一番の上子は教育をあきらめなければなりませんでした。

3) プロウガダン

その後、1992年ころにニニック・ママックからの移転についての具体的な説明がありました。その後、プロウガダンの移転のことが持ち上がりました。

1992年8月31日にプロウガダン移転が始まりました。私たちにとっては、それは全く突然のことで、このときにたくさんの軍隊が来ました。そのことは村では噂で持ちきりでした。このときに兵たちが村人たちを強制的に移転地につれて行ったということです。何があったんだろうと私はすぐにバイクに乗って見に行きました。プロウガダンがある国道沿いまで行って驚きました。そこには軍服を着てた軍人が自動小銃を持ち、国道にそって両側に並んで警備するように立っていたのです。軍人たちは銃を構えて威嚇する姿勢をとっていました。だいたい1mから3mぐらいの距離に1人が立っていました。軍隊に囲まれた道路を村人はトラック移動していきました。私はトラックの中にいるプロウガダンの人々の様子を見ることができました。多くの人は泣いていましたし、中には怒った顔をしていました。まるで、捕虜が連行されるような様子で、悲しく、恐ろしい光景でした。村の人はみな、自分たちの家にまだたくさんのものを置いていました。わたしは、後日、移動直後の村に行ってみたのです。既に村には誰もいなかったのですが、全部を運べなかった人が大事なものを取りに来ている様子でした。私は村の人と話をしましたが余り多くのことを言いたがりませんでした。プロウガダン村の人々はあなたたちも私たちと同じように移るんだと言っていました。本当に怖がっている様子で詳しいことは何も言いませんでした。このことは当時のスハルト政権下では当然のことです。今は改革の後ですから、村の人と話することができます。きっと言いたいことがいっぱいあるだろうと思います。もちろん、私も今だからはなせることです。

プロウガダンのことは私にとっても、他の村人にとっても衝撃的でした。補償金のことのはっきり知らされない状態であっても、政府が移転先の生活についての約束が違っても、兵隊が来て私たちを強制的に移動させるということが分かったのです。私は移転前にあらかじめ何か知らされていると思っていたのでプロウガダンに急に兵隊が来たときにはびっくりしました。もともと、スハルト政権下でダムに反対などということは言えないのですが、補償が不十分だ、移転先が整備されていないと苦情を言うことも一切許されないのだ、移転したくないなどと言うと軍隊によって何をされるか分からない恐ろしい状態なのだということを改めて思い知らされました。私たちには移転するしかないとあきらめるしかありませんでした。このことは私たちだけではなく、外の村でも同じだったろうと思います。

プロウガダンでは移転したときにゴム園も、水も整備されていない状態でした。それでも政府は無理矢理村人を移転させたのです。私たちも同じ運命になることを覚悟しなければならぬと感じました。実際には私たちはプロウガダンの土地よりもずっと悪い状態だったのです。

4) 移転

1994年に私は補償金の半額をもらいました。このときには補償金全額は知らされておらず、半額かどうか分かりませんでした。半額であることが分かったのは移転した後に全額支払われてからのことです。この補償金が支払われることはその前日になって初めて知らされました。最初に支払われた後も次にはいつ支払われるかについても知らされていませんでした。移転によって生活の全部が変わるというのに、いくら補償金がいくら、それがいつ支払われるのか全く知らされていませんでした。私たちは不安定な状態に置かれ、このときには腹が立ちましたが、政府には逆らえませんでした。このお金はPLMの職員から渡されました。

このころ、移転先の家を見に行きました。このときに粗末な家を見て、約束と違うことがはっきり分かりました。移転先のどの家の周りも草が生い茂り、入ることもできませんでした。政府が用意したゴム園も苗木すら植えていないことが分かりました。村には井戸もありましたが、水が出ず全くひどいものでした。政府の約束は全く守られないことがわかったのです。あまりにひどいので関係者にこれでは移転できないと苦情を言ったことがあります。しかし、末端の人ではどうすることもできませんし、こういうものだと言っていました。このときに私は移転先が整備されていようがまいが、補償されようがされまいが、無理矢理移転させるとというのが政府の考えだというのがはっきりわかりました。しかし、逆らうことはできることではありません。政府に言えばすぐに逮捕されてしまうかもしれません。家族のことを考えれば政府に意見を言うなどと言うことはとてもできませんでした。

1995年1月2日に、ルブック・アグンへの移転が始まりました。移転先の家はひどいものだという事は私たちには分かっていました。ゴム園も切り開いただけで苗木すら植えられていないことは私たちは知っていました。しかし、ルブック・アグンへの移転は兵隊も来ず平穏に行われました。プロウガダンの悲劇を見ている私たちはそうするより他にはなかったのです。移転した後である1995年の終わりに私はようやく補償金の半分を受け取りました。そのときに初めて補償金の金額全体が分かったのです。全体金額は分かりましたが、どうしてそのような金額になったかについては分かりませんでした。全部で650万ルピアをもらったのですが、内訳は最後まで分かりませんでした。

3. 移転後の生活状況

1) 移転後の家

移転先の家は6×6mの木造家屋で、床はコンクリートが薄く覆ってあるだけでした。政府が言っていたセミパーマメントハウスとはほど遠いものでした。しかも、移転したときには、私の割り当てられた家は草で覆われていて、すぐに入れませんでした。私の家は水はけがうまくいっておらず雨水が家の中に入ってくるような状態のようでした。というのは、というのは家の中に雨水が侵入したあとがあり、床の一部は50cmほど泥で覆われていました。壁には安っぽい板でできていて、泥がたまった部分は既に半分ぐらい腐っていて、壊れて穴が空いていました。移転した最初の日には家の中はあまりにひどい状態で、その日は中で寝ることができず、テントを作ってそこで寝ました。翌日、家の泥をかたづけ、なんとか生活できる程度にしました。当時、私の家族は妻、5人

の幼い子供でどうしていいものか分かりませんでした。家の中と言っても私たちは地面に寝ているのと同じで、ありがいっぱい出てきて私たちを襲いました。その後、私は床に板をおいて床下を作り生活できるようにしました。

2) 飲料水

新しい村では井戸が2世帯に1つありましたが、しかし井戸から水は出ませんでした。井戸は浅く、底はセメントで固められていました。水がでるはずがないのです。みかけだけの井戸でした。そのため、どの家もラナ・スンカイ川まで水をくみに行かなければなりません。水浴び、選択、トイレも全てラナ・スンカイ川で行いました。政府は便所を用意していたのですが、それはただ穴が掘られていて、その周りをアスベストで囲んだだけのものでした。ですから、トイレは全く役立ちませんでした。

3) ゴム園

ゴム園は家から2.5km ぐらいの位置にありました。歩いていかなければなりません。少し雨が降ると道はどろだらけになりでバイクが通れる状態ではありませんでした。私は歩いて30分ぐらいの距離でしたが、村の人には遠く1時間、2時間とかけてゴム園に行かなければならない人もいました。

私が支給されたゴム園では木は切り倒されていましたが、1本もゴムは植えられていませんでした。赤土が露出し何もありませんでした。何も植えられていないゴム園を前にして、私たち家族は本当に絶望的な気持ちでした。それでも私たちは政府に逆らうことはできません。私たちはただ呆然とした気持ちになるほかはありませんでした。そういう悲しい気持ち、悔しい気持ちを分かってほしいと思います。結局、このゴム園は2000年になるまで植え付けられることはありませんでした。

4) パラウィジャ地

40m × 100m のパラウィジャ(畑)についても、平らな土地があるだけで何も植えられていませんでした。これは本来陸稲(gogo)を植える目的でしたが、全く植えることができる状態ではありませんでした。森林をはぎ取っただけで赤土がむき出しになり、やせたままの土地で、土地が陸稲に全く向いていないのです。政府から種を支給され、植えたのですが失敗しました。その後、陸稲をあきらめ私たちはヤシやゴムを植えたり別のことに使っています。

5) インフラについて

道路は泥だらけのものがあるだけでした。道が乾いたときには自動車は通れますが、雨が降れば自動車は通れません。電気は通っていませんでした。2年ぐらいしてから結局別に自分たちで引き込み料を払って、電気代も払わされました。政府は約束を守らなかったのです。

小学校は整備されていましたが、ムシヨラはありましたが、小さなものでした。ルマガダンありません。

- 6) 私たちはこのようなひどい環境下に移転させられました。移転してから私は漁業ができなくなり、失業状態でした。生活はたちどころに困りました。最初は政府からの補償金と政府から支給された米、ほし魚で生活していました。その米もひどいものでくさいにおいがしていました。政府から支給された米は本来ニワトリやアヒルが食べるようなものでした。魚は見たこともないほど腐っており、ウジ虫がわいていました。私も含めて殆どの人は支給された米、魚の殆どを捨てていました。こうした状況の下、やむにやまれず勇気を振り絞って状況の改善を求めてチャマク(郡)のオフィスに行きましたが、何も改善されませんでした。

4. 転居

- 1) 私はこうした状況下で 2 年間にまんしていたのですが、限界を感じ、1997 年、クアラン・ジャヤの土地を補償金から 50 万ルピアを出して買って家を建てました。これはタナウラヤットでの一部です。この土地に 10 × 20m ほどの家を作りました。また、同じ年に他に転売しないという約束でタナウラヤットの土地を 1ha ほど購入して自分の手でゴムを 500 本ぐらい植えました。しかし、このうち、200 本ほどはイノシシやシカの食害、さらにシロアリ、キノコなどにやられてしまいました。300 本ぐらいは何とか収穫できるようになり、ここからは 15 万ルピアの収入が得られています。しかし、政府から提供されたゴム園は何も植えられないまま放置されていました。
- 2) 政府のあまりにひどい待遇に私たちは我慢の限界に達していました。移転後、多くの人が生活に困りどうしようもない状態になっていたからです。政府は怖かったのですが家族をかかえて生活できないのですから私たちは抗議するより外にとる道がありませんでした。1999 年にこの地域の 8 つの村の住民 500 名ぐらいとともに私はプカンバルの知事のオフィスに対して抗議行動をしました。これまでの不満がたまっていたのでこのときの行動は激しいものでした。窓ガラスも割れたと思います。誰もが、これでは生活ができない、がまんも限界だという気持ちだったと思います。私たちは特にゴム園について約束、移転の時には収穫できる状態としておくという約束が守られていないことについて抗議しました。このときの抗議行動は各村がよびかけたものです。ニニック・ママックも今度ばかりは勇気を持って呼びかけました。学生たちも応援してくれ私たちは学生と一緒にデモをしました。

1999 年の抗議行動が行われた後、2000 年になって政府はようやく第 1 回目の植林事業を行いました。しかし、政府の事業で 900 本のゴムが植えられましたが管理が行き届かず 500 本のゴムが、イノシシ、シカ、シロアリ、キノコなどにやられてしまいました。

- 3) 私はもともと漁師をしていましたが、移転によって職を失いました。以前は出稼ぎなどほとんどしなくてよかったのですが、現状では出稼ぎをせざる得ません。年に半分ぐらいは外で働き、半分ぐらいは父の土地の仕事をしています。ゴム園は現状ではまだうまくいっていません。出稼ぎが多いために私のゴム園の手入れは行き届きません。子供がたくさんいるため、次男、長女、次女の学費の工面も大変です。電気代も滞っています。

既に申しあげましたように、かつての村では川がすぐ近くにあり、漁で十分な生活が

できました。生活に必要なものは自分たちで作ることができました。いまではそれができなくなっています。こういうひどい生活になることは移転前から分かっていました。移転前に移転先の家がひどく粗末な上にぼろぼろの状態であったのを見て政府は何もしないだろうと考えていました。しかし、私たちには選択の余地はなかったのです。当時のインドネシアでは政府に逆らうことでどんな恐ろしい報復があるか分かりませんでした。プロウガダンの強制移転のこともあります。

ダム開発はまたミナンカバウののよき伝統を無くしてしまいました。タナウラヤットというのは村の人たちが共同して生活していこうという証です。それが今では足りなくなり、私たちが借りたように村の新婚夫婦に提供できる土地はなくなりました。村が次の世代のために配慮することができなくなっているのです。みなで共同して作物を作るという伝統も失われつつあります。村の行事も無くなってきています。10年もたつと村の絆は失われもっと大変なことになるだろうと思います。

以上